

自分をあきらめないで

嶋中 典子

厚生省看護研修研究センター助産婦養成所教員専攻研修生

施設勤務 12 年目の春。「このままじゃいけない。なんとかしなくちゃ！」 何かにせきたてられ、焦りのようなものが私の中で爆発した。ずーっと以前からくすぶり続けていた思いに、もう気づかないふりができなくなっていた。病院ではベテランと呼ばれ、各パートのリーダーをこなし、三交替勤務の合間に学生や後輩の指導にあたる。「指導の『シ』の字」も知らないくせに、何の疑問も抱かなくなっていた。そんな自分が急に怖くなって、初心に帰るべく厚生省看護研修研究センターの門を叩いたのが、ちょうど去年の今頃のことだった。

ここ厚生省看護研修研究センターには、日本各地から看護教員を目指した新進気鋭が大勢集う。私たち助産婦養成所教員専攻 20 人の出身地も北海道から九州までとその地域が広い。広い分だけ、たくさんうろこの見識を得る機会に恵まれた。何しろ「目から鱗が落ちる」毎日だった。きっと皆の鱗を集めたら大きな魚が簡単にできあがるだろう。それほどまでに衝撃的な体験の連続だった。

こと自分に関して言えば、今まであまりにも安穩とした生活をしてきたようだ。男女雇用機会均等法が制定され、それに伴い男性の助産婦資格が社会的に関心を集めていること、それどころか少産時代にあり助産婦そのものの存続が危ぶまれていることなど、どこか蚊帳の外的できごとにしかとらえていなかったのだから……。皆とのグループ学習を通して、今助産婦は社会から何を求められているのか、助産婦がしなければならないことは何なのか、そして私たちにできることは何なのかについて、何度となく議論を交してきた。卒業すれば、看護学校や助産婦学校の教員になる者、臨床指導者になる者、病棟勤務に戻る者などその

背景はさまざまだが、これらの議論は必ずプラスとなって、それぞれの足もとをしっかりと見つめさせ、助産婦としての展望を確かなものとしていくに違いない。

この 1 年間で痛切に感じたことは、自分をあきらめてはいけないということ、いつも自分の可能性を信じていようということだ。もっとも、どんなに楽天的な私でも、目の前の課題の多さに切羽詰まって友達に泣きついたこともある。やけ食いに走ったこともあれば、食べる時間さえ惜しい時もあった。教育実習では、意気揚々と乗り込んだまではよかったものの、2 日も経たないうちに不安と緊張に押しつぶされそうになった。そんな時、いつも皆に励まされ、勇気づけられてきた。教育実習が終了し、学び得たことを語り、共有しあうなかで、誰もが着実に一歩ずつ前進していた。キラキラ輝いた目をしていた。そして、自分をあきらめずにここまでこれたことを互いに感謝しあっていた。

現在、卒業を目前に、この 1 年の集大成であるカリキュラム編成にとりくんでいる。一つ一つの言葉の意味を考え、今まで学習してきたことを反芻しながら進めていくその過程で、自分が磨かれ、グループが育っていく。確実に何かに近づいていることを私たちは実感している。

4 月、旅立ちの季節を迎える。私たちは、ここでのたくさんのめぐりあいを大切に、北海道から九州まで長く永く手をつなぎ合って、いつの日か旋風を巻き起こそうと企てている。今年新しくスタートをきる皆さんも、自分をあきらめずに、自分の可能性を信じて邁進してほしい。私たち助産婦は、いつまでも同じ仲間なんだから。ネッ！